九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宋代における『尚書』解釈の基礎的研究

青木，洋司

https://hdl.handle.net/2324/1440984

出版情報：九州大学，2013，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

区分	甲

論文題目　宋代における『尚書』解釈の基礎的研究

氏　名　　青木 洋司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、宋代における『尚書』解釈に関して、当時の代表的な学者の所説を分析することにより、その解明を行ったものである。

従来の『尚書』に関する研究は、唐代の『尚書正義』などの訓詁の学術や、清代の『尚書古文疏証』などの考証の学術が中心であった。宋代の『尚書』解釈は、当時有力であった注釈書の多くが現存していないという資料上の制約が存在するため、具体的な分析は、殆ど行われていない。そこで、本論文では、残存する『尚書』注釈書以外にも、従来の研究では指摘されていない佚文を収集し、分析することにより、宋代における『尚書』解釈を考察した。

本論文は、序論、本論、結論より構成されており、本論は六章からなる。

序論では、宋代における『尚書』解釈に関する先行研究と、その問題点を整理し、本論文の研究目的と研究方法などを明らかにしている。

第一章では、宋代における『尚書』解釈においても問題とされる「今文尚書」「古文尚書」「偽古文尚書」など『尚書』の成立と伝承や、『尚書』経文との記述の差違や、その作者が問題とされる「書序」の北宋に至るまでの解釈について考察した。さらに本章では、『尚書正義』の成立後、北宋慶暦年間に至るまでの『尚書』注釈書の動向について考察した。

第二章では、劉敞（一〇一九～一〇六八）の『七経小伝』について検討した。劉敞は、漢唐の訓詁の学術とは異なる経書の解釈を行ったと評価される人物である。従来の研究では、劉敞は、『尚書』経文のみならず、孔安国の伝にも疑問を持っていたとされる。本章では、評価する一面も存在する孔安国の伝への態度や、書序や『尚書』経文の解釈について考察した。

第三章では、『尚書新義』について検討した。『尚書新義』は、北宋神宗の要請により、王安石(一〇二一～一〇八六)が作成に関わった『三経新義』の一つとして、新学の隆盛とともに、北宋から南宋にかけて非常に有力な注釈書であった。『尚書新義』にしばしば見える孔安国の伝や孔穎達の疏に基づかない経文の解釈や、それに基づく『尚書』経文の大幅な読み替えについて考察した。また本章では、『三経新義』の輯佚本として評価される程元敏氏の『三経新義輯考匯評』（台北国立編訳館、一九八六年）が、王炎や王日休など「王姓」の注釈を『尚書新義』の佚文と誤認している問題について検討した。

第四章では、蘇軾（一〇三六～一一〇一）の『東坡書伝』について検討した。『東坡書伝』は、北宋における現存する唯一の注釈書であり、尚書学史上において非常に重要な著作である。従来の研究では、蘇軾の『尚書』解釈は、『尚書正義』と異なる新たな解釈を行ったとされるが、実際には、孔安国の伝や孔穎達の疏に基づく解釈が多く存在する問題について考察した。また本章では、従来の研究では、海南島時期（元符三年、蘇軾六五歳）の著作とされる『東坡書伝』が、黄州時期（元豊四年、蘇軾四六歳）から海南島時期にかけての長い期間を経て、制作された著作であることを明らかにした。

第五章では、呉棫（宣和六年進士）の『書裨伝』を検討した。呉棫は、閻若璩『古文尚書疏証』（巻八、言疑古文自呉才老始）において顕彰されて以来、「古文尚書」に対して、初めて疑義を明言した人物として、よく知られる。しかし、呉棫の『尚書』解釈を取り上げたものは、その著述である『書裨伝』が散佚したこともあって、殆ど存在しない。本章では、蔡沈『書集伝』以外にも、陳大猷『書集伝』などに見える『書裨伝』の佚文の存在や、呉棫『尚書』解釈の中でも佚文が多く存在する書序、孔安国の伝、『尚書』の文体に対する議論について考察した。

第六章では、林之奇（一一一二～一一七六）の『尚書全解』を検討した。林之奇は、『史記』・『漢書』以来、『尚書正義』においても踏襲された書序は孔子が作成したとする説を退け、史官の作成によると指摘したことで高く評価される人物である。従来の研究では、林之奇の特徴的な史官の解釈が、書序のみに限定されていた。そこで本章では、林之奇の『尚書』解釈全体において、史官がどのように解釈されていたかについて考察した。また本章では、程頤の弟子である楊時の流れを汲む林之奇が、『尚書全解』において行った『尚書新義』への批判、特に楊時の説の引用について考察した。

結論では、唐代に成立した『尚書正義』の解釈が、五代十国を経て、北宋慶暦年間に至るまでは、遵守されていたことを確認し、『尚書』経文の大幅な読み替えや、孔安国の伝や孔穎達の疏と異なる解釈を行った『尚書新義』が契機となり、『尚書』解釈が大きく変化したことについて考察した。また、孔安国の伝や孔穎達の疏は、蘇軾が『東坡書伝』に多く引用し、呉棫がその解釈の是非を論じていることに見えるように、南宋初期においても、なお有力な『尚書』注釈書であったのを考察した。

以上のように、本論文では、唐代の『尚書正義』などの訓詁の学術や、清代の『尚書古文疏証』などの考証の学術とは異なるものとして、当時の代表的な学者の所説を分析し、宋代における『尚書』解釈の特色を解明したものである。